

第11回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった」

オンライン講演会①

「登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ」

渡辺 賢二

資料館展示専門部会委員, 元法政大学第二中学・高等学校教諭

はじめに

こんにちは。資料館展示部会専門委員をやっております, 渡辺賢二でございます。今日は「登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ」と題して, お話をさせていただきたいと思います。本来であれば, 直接皆さんと顔を合わせてお話したいところですが, こういう事情で, ぜひ画像だけでということで, よろしくお願ひしたいと思ひます。

1. 登戸研究所の概要

(1) 登戸研究所があった場所

登戸研究所がどこにあったのかというと, 現在の明治大学生田キャンパスがそれにあたります。向ヶ丘遊園と生田のちょうど間の丘の上に, 明治大学生田キャンパスがありますが, そこが陸軍の秘密戦のための兵器を開発する登戸研究所があった場所でした。この場所は何故選ばれたのかというと, 新宿に陸軍の科学研究所というのがありました。その一つの部局が, 電波兵器なんかを研究するのに都合の良い場所を探していました。そうしましたら, 丁度, 今の生田キャンパスの場所, これが良いということで選んだわけです。それは小田急線で, 新宿から今の向ヶ丘遊園, 当時は稲田登戸と言いました。そこに直接急行できて, そこから歩いて行ける。非常に良い場所だという事で選んだ場所でした。

現在の生田キャンパスは小田急線に沿って, 広大な理工学部・農学部があります。終戦直後の登戸研究所, これは向ヶ丘遊園と生田の間に, 100以上の建物があり, 敷地面積も合わせると11万坪という広大な研究所の敷地がありました。陸軍の技術研究所が10あったわけですが,

その中でも最大のものでした。

(2) 明治大学構内に今も残る登戸研究所の遺跡

今も明治大学構内には、いろいろな遺跡が残っております。一つ象徴的なのは、動物慰霊碑です。これは、書いたのが篠田鐮という、ここの所長で、最後中将になる人です。それでこの動物慰霊碑の裏面には、「昭和十八年三月 陸軍登戸研究所建之」という事で、どんな動物を実験したんだろうか、という思いがここからひたひたと、私たちに呼びかけているように思います。この昭和18(1943)年3月というのは、大変重要な年で、弥心神社と当時言っていて今は明治大学生田神社となっていますが、ここに登戸研究所跡碑を建てています。これが今日話す非常に重要なポイントになります。

この弥心神社というのは、発明の神を祀るという事で、これも昭和18年3月に建てられるわけですが、ここに通っている1000名くらいの人たちは誰一人知らない人がいない。ここに集まって、発明祈願とか戦勝祈願とか行った場所でした。この碑や神社が残っているのは、大変珍しいことだと思います。普通、大学といっても文系だったら、動物慰霊碑なんていうものはいらないわけです。神社ももちろんありません。しかしこれがなぜ残ったのかというと、1951年に明治大学がここを購入して入ってきました。その学部が農学部だったということが幸いしました。農学部は実験をやりますので、動物慰霊碑が必要でした。ですから、これは良いという事で、ここで毎年動物慰霊祭をやるようになりました。それから神社も、これも農学部としては活用できるという事で、11月には収穫感謝祭をこの場でやると。そんな形で保存されてきました。それが今、登戸研究所の軌跡を伝える、大変重要な遺跡として保存されるに至っている、その背景になっているわけです。そのほか、陸軍のマークがついた消火栓などもあります。

それから正門を入ると、すぐにヒマラヤスギがずーっと植えられています。その後ろは本部があった場所でした。このヒマラヤスギはいつ植えられたのかというと、日本高等拓植学校というブラジル移民の人達を指導する学校が建てられた時(1932年)に植えたものですから、もう90年ぐらい経ちます。ところがブラジル移民が減少し、廃校になりました。そこに登戸研究所が来て、それを本部として、さらに拡張して登戸研究所が整備されていきました。この中には、弾薬庫なんかもあります。

(3) 戦後も残っていた登戸研究所の建物

登戸研究所は100棟以上ある建物から成り立っています。1947年に米軍が空撮していますが、空襲の跡がありません。ここは得体も知れない事をやっているに違いないという事で、アメリカは空襲一つしませんでした。生田や登戸周辺は、攻撃するけれど、ここは保存しました。で

すから戦後すぐにここに調査に入ってくる背景はそこにありました。

戦後は、明治大学農学部が入りました。農学部というのは、長靴を履いて色んな研究をする、農業技術者を育てる学部でしたから、この兵舎みたいな建物をそのまま利用して、1980年代までこういう風貌で残ったわけです。それが私たちの、戦争遺跡として保存する運動を励ます材料にもなりました。そういういくつかの偶然が、登戸研究所を発掘し、今日に残していく一つの偶然がその背景にあったとっていいと思います。

これが1966年に明大の人が撮った旧本館、本部跡の写真です⁽¹⁾。この中には、く号兵器（怪力光線、決戦兵器とも言われますが）、それを研究開発していた建物も写っています。木造ですが、中には柱一つない西洋トラスト構造という、鉄筋で梁を張りめぐらしている建物でした。ここで数十メートル先の動物を殺害できる光線を発明しました。そこには三笠宮も来て見学している歴史もありました。

(4) 極秘にされていた登戸研究所

この登戸研究所は多くの日本国民は知らなかったのです。日本国民だけではなくて軍部の人も知らなかったのです。知っていた人はごくごく一部です。参謀本部と関係部局、天皇並びに皇族、それから陸軍科学研究所の担当部局、そしてここで作った兵器を使う関係で、陸軍中野学校の関係者。そしてもちろん陸軍登戸研究所に勤務していた人、約1000人になります。囑託になった人も含めてです。その他、陸軍登戸研究所に関係した特務機関、憲兵の人は知っていたと思います。しかし、ごくごく一部のしか知らない世界でした。なぜ知られていなかったのか。それはここが秘密戦のための研究所だったからです。

(5) 登戸研究所で研究されていた秘密戦兵器・器材

秘密戦というのは、防諜・諜報、これはスパイ防止・スパイ活動です。それから謀略。何をやってもいいから勝つための兵器を発明する。それから宣伝。自国がいかにいいことやっているかという宣伝をします。これを秘密戦と言います。防諜・諜報器材としては、ここで無線機材、盗聴機材、秘密インク、秘密カメラ、変装機材、犬迷い剤なども作っています。犬迷い剤というのは何かというと、これはスパイをする人たちが一番恐れるのは、相手の国の大砲とかそういう物ではなかったんですね。軍用犬に吠えられる事なんです。ですから、スパイ活動する人たちから、軍用犬が吠えない薬を発明してくれという注文がいっぱい来しました。そこで登戸研究所では忍者を研究して、忍者が家に入る時にミミズを撒いたと。なぜ撒いたかということ、ミミズには犬を吠えさせないものがあるという事で撒いたらいいんです。その忍者の研究から、特殊なエキスをミミズから取って、それを薬品にして噴霧したり、撒いたりしながらスパイ活動をする薬を発明した。それを多く大陸に送っていく。これは大変重宝がられたともいいます。

秘密インキですが、これは白い本やノートにインキ、食塩・のり・アスピリン、その他、これを細い筆で書く。しかしそれはそのまま乾くと消えるわけです。それを受け取る側がヨードを塗ったり、あるいは紫外線を当てたりすると浮き上がってくる、こういうスパイの暗号機材として秘密インキが大量に作られたという事もあります。

謀略機材としては、要人殺害用の各種毒物、特に、すぐには死なない特殊な青酸ニトリルという、数分とか20分とか経ってから相手がバタバタ倒れる、その間にこちら側の撒いた要員は逃げる。そういう物とか、一瞬にして死ぬ蛇の毒、これを注射器で打って殺す物とか、火炎瓶、毒ガス、毒入りチョコ。それから細菌兵器では、中国で大量に撒いた小粒菌核病菌しょうりゅうきんかくびょうきんというものとか、あるいはこれは後で出ますが、アメリカに風船爆弾を投下します。その時ウイルス兵器をつける。特にアメリカ人は自分たちの生活上重要な牛、これが大量に死んだらこれはびっくりするだろうと。したがって牛疫ウイルスぎゅうえきというすぐに牛が死ぬようなウイルス兵器の研究もやりました。それからこれも後から出てきますが偽造紙幣。これは大量に作っています。こういう平時では考えられないような謀略の機材をここで作っていたという事になります。

それから宣伝機材としては、和紙をこんにゃく糊で貼った気球を作ってビラを付けて飛ばすとか、特殊の拡声器とかやっていますが、この宣伝機材は、最後は風船爆弾としてさらに発展することになりました。

登戸研究所は1943年4月に、軍功によって陸軍大臣東条英機から陸軍技術有功章を授与されます。これがその受章状です。篠田鎌の次が、伴繁雄という人が載っていますが、この人が青酸ニトリルなどで、中国で人体実験をして、兵器として活用した人です。その人が技術有功章をもらうわけです。ですから、内容は「特殊理化学資材を研究し優秀なる資材」となっていますが、何をやったかというのを書いていません。しかし、そういう謀略兵器を開発したことが章に繋がったことは確かです。この副賞が当時のお金で1万円、今のお金に直すと1000万円くらいもらえます。それで動物慰霊碑や神社を建てたというわけです。

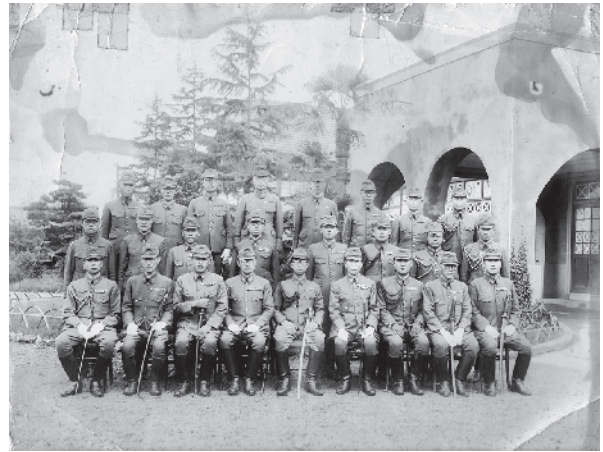
(6) 軍の法規からも消されていた登戸研究所

この研究所は、陸軍の法規の中でも特殊な扱いをされていました。陸軍の技術研究所というのは番号を振られます。第一条には第一技術研究所、第二条には第二技術研究所。ところが、この登戸研究所は九番目につくられたので第九技術研究所と呼ばれるはずでした。しかし、第九条にはなぜか第十技術研究所とされていました。したがって、第九技術研究所は軍の法規の中からも消されていたのです。そこで、陸軍登戸研究所としかいいようがなかったのです。なぜこの名前を使ったかという、向ヶ丘遊園という駅は、当時は稲田登戸といいました。新宿から急行で来て、そこから歩いて行くので登戸研究所としかいいようがなかった研究所でした。こうした例は、学校では陸軍中野学校、中野駅で降りるスパイたちを育てる学校、こういうも

のと連動して、陸軍の中では特殊な役割を果たしたことを意味します。

これは三笠宮が風船爆弾を打ち上げる直前、登戸研究所に視察に来た写真です（第1図）。いかに皇族なども含めてここを重視したかという事が分かります。

大本営・参謀本部は、この研究所に大いに期待していました。そのことを二つの例でお話します。



第1図 三笠宮視察時に撮影された写真
1944（昭和19）年撮影（資料館所蔵）

(7) 「秘密の中の秘密」であった偽造紙幣による作戦

一つは、「秘密の中の秘密」であった偽造紙幣による作戦を行ったという事です。現代戦は武力戦だけで勝利することはかなり難しいです。日本の傀儡政権をいかにつくるかという事が中国との戦いで重要でした。そこで、日本は柳条湖事件という事件を起こし、関東軍の謀略から始まって、満州事変と満州国建国によって、中国の東北部に一つの満州国という傀儡政権を打ち立てました。それが日中戦争でも同じことを行いました。それが傀儡南京政権、汪兆銘政権を樹立しようという事でした。その汪兆銘政権を樹立するという事は、なかなか難しい問題でした。

中国政府は蒋介石政権と言いますが、それは法幣制度を確立していました。1935年から作られたわけです。米英の支援で法幣の制度ができたわけです。紙幣の印刷工場も香港やラングーン（ともに当時はイギリス領）にありました。そのことが日本の軍部、特に秘密戦部隊にとってみれば弱点だとみました。そうした経済体制の弱点をつかんで本格的な経済戦をやっていくことで、偽造紙幣作戦をやって、汪兆銘政権の経済政策を助けようとしたわけです。

1942年、アジア太平洋戦争に入ってから、本格的な謀略作戦に入っていきます。それは香港などで中国の国民政府のお札を刷っていたわけですが、そこを襲ってですね、登戸研究所の勤務員が行って印刷機材を持ってきた。中国紙幣の原版、それから印刷機械、そういうものを持ってきて登戸で製造しました。ですから、ここからは本物で使えるものがここで作られた事になります。総額45億元製造して、35億元使用しています。これは当時の予算額を上回るものを作ったという事になります。したがってこれで軍需物資を買って、それから兵士の給料にも与えるわけですから、日本の財政を全然痛める事なく戦争をするという、ものすごく重要な役割を果たしていたわけです。したがって中国政府は、それに対抗する処置として、印刷機械も持っていかれたし、大変困るわけです。そこでお札の制度も崩壊してもいいという覚悟で、米英の支援で高額紙幣として1万元札とか、最後は100万元札まで作って偽札を淘汰する形で

応戦した。これがお札を作ったの戦いだっただのです。

偽造紙幣の印刷の工場は、10年前の東北大震災が起こる前まではありました。それがもう古くなったという事で、今は無くなりました。この建物も下はコンクリートを敷いて、その下に丸い石を敷いて、どんなに重い印刷機が入っても大丈夫なようなところで偽造紙幣を作っていたという事になります。

これが資料館に今も展示している六連の偽札です。なぜ偽札かというと、これはちゃんとして持っていけば本物として使えるわけですが、どうも色がおかしいという事で、登戸研究所での製造の過程で廃棄したものです。それがありますから、ここで作って使ったものはもう偽札か本物かは分からない。本物として使用したこともありますが、これは偽札に他ならないという事になります。

(8) 風船爆弾作戦

二つ目は、アメリカでの風船爆弾作戦です。アメリカ向けに「決戦兵器」として何かやりなさいという命令が出ました。そこで登戸研究所では、風船爆弾を開発したわけです。飛行機もダメ、潜水艦もダメ、そうしたら風船を上げてそれに兵器を積んで飛ばそうという作戦でした。したがって、その作戦を受けて、この登戸研究所には気象研究者や電気関係研究者、紙・糊などの科学研究者などが動員され、和紙をこんにゃく糊で貼って直径10メートルくらいの気球を作って、そして高度維持装置でアメリカまで届くものを開発しました。爆弾部分には、アメリカ人が食べられなくなったら大変困るというものは牛だろうという事で、牛疫ウイルスという、当時これにかかったら牛はころりと死ぬ、その兵器を開発して、強毒化して、零下40度でも生きるような形にして搭載する研究を登戸研究所で行って、2トンといわれる大量の生物化学兵器を貯蔵するまでに至りました。

しかし実際はそれを投下しませんでした。なぜかという、やはり生物化学兵器を飛ばすというのは、国際法で禁じられていたわけです。したがってそれをやるんだったら大変だという事で、やるぞやるぞと見せかけて、実際は焼夷弾を搭載した謀略兵器として9300発打ち上げます。打ち上げる場所は、一宮、大津、そして勿来^{なご}という3か所。そこから打ち上げます。そして1000発くらいがアメリカに届いたわけです。これにはアメリカはびっくりしますね。したがってアメリカとしてはそれを途中で撃ち落としたりするわけですが、大陸に1000発届いた。しかし、焼夷弾ですから、しかも冬ですから、落ちて雪の上という事が圧倒的に多かったために、効果はすごく少なかったといえると思います。

(9) 戦後も秘密にされた登戸研究所の実相

戦後の話ですが、冷戦下、アメリカは登戸研究所がやっているものが謀略作戦の兵器だと考

えて、731部隊と同じように戦後すぐに尋問に入ってきます。これはサンダースレポート、トンプソンレポート、フェルレポート、ヒルレポートにも見られます。登戸研究所や731部隊の関係者が尋問されましたが、しかし、なかなか本当のことを言いませんでした。最終的には「ギブアンドテイク」という約束で戦犯免責と引き換えに、登戸研究所も731部隊も、すべて米軍に資料を引き渡しました。そして、陸軍登戸研究所関係者はすべて公職に復帰します。しかし、それだけではだめだという事で、米軍は登戸研究所の人たちの一部を横須賀のキャンプ、そしてサンフランシスコなどにそのまま動員して要員として使い資料を収集して、朝鮮戦争やベトナム戦争にあたったという歴史も今では明らかになっています。

2. 市民・高校生が明らかに、明治大学がまとめた登戸研究所の実相

(1) 市民・高校生による登戸研究所の掘り起こし

ここからが今日のお話の本題で、登戸研究所がどういうふうなかたちで明らかになってきたのかという歴史をお話したいと思います。戦後すぐに松本清張さんや齊藤充功さん、そういうジャーナリストなどが登戸研究所を注目して本をまとめたものがありました。しかし、その全体像はほとんど分からなかったわけです。それがどういうふうにして分かってきたのかという、大変不思議な経過でした。

それは、市民や高校生の取り組みが決定的な意義があったという事です。一つ目は市民が動く時、大切なものが発掘されるんだという事をお話したいと思います。1986年から、川崎市では平和教育学級などが始まります。そして1987年から川崎市の中原区の川崎中原平和教育学級というところで、川崎の戦争中どうだったのかという事を調べる学級が呼びかけられます。川崎に住む人々、それから法政二高という私が勤務した高校生なども含めた学級で調べ始めました。しかし登戸研究所に来ても何の材料も集まりませんでした。誰一人話してくれる人もいませんでした。ある時一人の人が来ます。これも後でその写真も出ますが、井上さんという人でした。その井上さんという人から情報を得て、「誰か話す人いないんですか？」と聞くと、「いや誰も話さないよ。墓場まで持って行こうとして別れたから」と言うのです。

しかし、ちょうど今から37年前に登戸研究所に勤めた人たちの登研会をつくらうという事で、名簿を作っている、その名簿の中から川崎に住む人たちの名前を提供受けて、その名簿にアンケートを送ったんです。そうしたら、15歳でここに勤めたという一人の少女が史料を持っていますというのです。不思議なことに防衛庁（現防衛省）に行っても史料がない、国会図書館に行ってももちろんない、何の史料もない登戸研究所について史料があると。まあ大したもの

じゃないだろうと、15歳ですからね。それで行きましたら『雑書綴』という史料を提供してくれたのです。雑書ですから「雑書」だと思いいになる方も多いかと思いますが、これが決定的なものでした。

これは九百何枚も綴っています。しかも、陸軍登戸研究所とちゃんと書いてある。そしてどういう事を行ったのかという事をちゃんと書いてある和文タイプの綴りだったのです。「こうしたものを何で持ってたんですか」と聞くと、「いや、私は重要なものだとは全く知らなかったんです」というふうに小林コトさんという人は語ってくれました。和文タイプというのはなかなか難しかった。だから、最初は全然やる気もしなかったしできなかった。ところが登戸研究所の第二科で「あなたは優秀だし生真面目だからできるだろう」ということで、渋谷のタイプの学校に通い続けるわけです。そして練習し続けて和文タイピストとして第二科の仕事を受けた。したがってそのうちの極秘という判の無いものの、一つの複製だけは綴じることを許されたと。そういう偶然があったんですね。それを毎日毎日1枚ずつは綴じ続けて、そして九百何枚の綴りになったというわけです。大変な努力の上で作ったのがこの『雑書綴』だと。「しかし、そういうものを綴ることをどうして許されたんですか」と聞いたら、「それは自分の技術が上達していることを確かめるために一日1枚だけは許されたんです」と語ってくれました。そして「それが戦後どうして自分の手元にあるんですか」と聞いたら、「実はこれは重要だから廃棄しなければいけないと敗戦の時に思ったけれども、しかし自分にとっては宝物だった。毎日毎日寝ないで打ったりしたものもある。和文タイプっていうのは難しいです」というふうに言うんですね。そしてそれを綴じ続けたものを何とか自分の宝物だからと持ち帰ろうと、守衛さんが知り合いだったので何とか許してくださいという事で、持ち帰ったものだという事になるわけです。そういうかたちで持ち帰ったものが、戦後40年過ぎて私たちがアンケートに答えてくれた小林コトさんの家に行って、これを頂いて、それをコピーして展示するということができるまでに至ったわけです。こうした一般の15歳の少女が何で戦争なんてと思うかもしれませんが、こういう偶然が登戸研究所の謎を明かしていくんですね。非常に大きなきっかけになったんだという事を私たちは知ってもらいたいと思います。

それから二つ目の問題は、この登戸研究所の掘り起こしの決定的な役割を担ったのは、教師とか研究者ではなくて高校生だという事です。私たちの調査研究に高校生が加わったんです。ところがその高校生が登戸研究所の人たちに聞く時に、その時の聞き方が大変重要だという事です。大人は、登戸研究所はすごく悪い事をしたんじゃないかなとかたちで接しますが、そうではなくて、戦争中どんなことがあったんですかと真っ白な頭で聞きます。したがって登戸研究所に勤めた人たちは、若い孫のような高校生に対して戦争っていうのはこういう事もあるんだよということを話そうという気持ちになってくれたんですね。そして異口同音に言うことができました。それが、「大人には話さないが、君たち高校生には話そう」。こうして登戸研

究所に勤めた人たちがここに勤めてこんな事をしたんだよという事を語ってくれて、私たちに
も伝わるようになったわけです。これはすごく衝撃的な事でした。しかし同時に高校生が取り
組むという事は、別の発想を私たちにもたらしめました。それは陸軍登戸研所保存・活用の意義
でもあります。「戦争と平和というのはそんな遠い関係ではない。私たちの生き方、どうい
う生き方を選択するのかと関係する」と高校生が教えてくれました。

そのきっかけは、石井式濾水機の濾過筒が発掘されたという事になります。石井式濾水機の
濾過筒というのは、石井四郎という 731 部隊を統括する指揮者が細菌戦をやって、自分たちは
生き残っていくためにきれいな水を供給する、水を濾過するための兵器でした。それが私たち
に渡されることになりました。それがどういう経過かという、この写真が⁽²⁾ 最初に高校生
が聞き取った時、伴繁雄さんという先程の陸軍技術有功章を取った人で、この少女は北原さん
という方、若かったのですがもう 40 代で亡くなってしまいました。伴さんは大人の方は向か
ないで高校生の方を向いて、登戸研究所はこういう事を行ったんだよと話してくれるんです。
そして、自宅に石井式濾水機の濾過筒がだいたい 700 本から 800 本あったんです。これは現在、
登戸研究所資料館に全部提供され、展示されています。伴さんは高校生に「濾過筒を調べてご
らん。大変なことが分かるよ」という事で手渡してくれたんです。これを受け取った高校生は、
これを作っている工場を探し出しました。日本濾水機という、横浜の井土ヶ谷にある工場で
した。そこを訪ねると、その社長さんは「これは最初、石井式濾水機ではなかった。自分たちが
関東大震災で大変な被害を受けて、汚い水をきれいにするために日本濾水機が特許を取ったん
だ。ところが、それを石井四郎が軍で使うということで特許ごと持って行って、戦争中は石井
式濾水機というかたちですべてそこに供給されるに至ったんだ」という事を話してくれました。
高校生はそれを聞いて、「戦争と平和は裏表の関係である。道具として活用するのか、兵器に
なるのか、これは私たち一人一人の生き方に関わるんだ」という事を私たちに語ってくれま
した。ですから、登戸研究所は負の遺産というだけではなく、技術そのものは大変な災害時も役
立つようなものを発明している。そういう面でも、私たちは科学の在り方を問いかけていく上
で、登戸研究所は重要な場所だったんだという事を知ることができました。

(2) 「登研会」の結成と果たした役割

ここからが大変重要な、今日お話ししたい内容です。この登戸研究所が保存されるに至った、
一つの重要な背景に、登研会というものがあります。この登研会がどのようなもので、どのよ
うな役割を果たしてきたのかという事をお話したいと思います。

今から 39 年前、第一回登研会を開催した時の案内状です。この時は箱根湯本の南風荘で開
かれ、まだ呼びかけ人も数名で始めました。そして登研会をつくり、第二回は 1984 年に熱海
のニューフジヤ・ホテルで開かれました。その頃から登研会の活動がさらに活発化していきま

す。そして1986年には、自分たちの思いを伝えていく手段があってもよいだろうという事で、この会をさらに発展させていくことになり、1988年から89年にかけて、自分たちが働いた登戸研究所に跡碑を建てようという運動が始まりました。これが極めて大事なことだと思います。3つの碑文案を作り、一つ目の案は、登戸研究所がやったことを細かく書いている碑です。正面は「陸軍登戸研究所跡碑」と決まっています。第二案として大変珍しい兵器を作っていた場所だという事を書く。そして三つ目の案は「想う」。自分たちが登戸研究所について想う。その下には句が詠まれていて、「過ぎし日は この丘に立ちめぐり逢う」⁽³⁾。

1988年に、紀州鉄道の熱海ホテルで壮大な第4回登研会が開かれます。その時にどれを選ぶか決めたのですが、その決め方は多数決でした。軍部ですから偉い将校の意見で決

めるのではなく、登戸研究所に勤めた人たちは皆、対等な形で話をし、思いを語り合う事ができる、これが登研会の特徴でした。その登研会が選んだものがどれだったかという、恐らく偉い人が勝手に作るのであれば第一案だと思います。ところが、多数決で「想う」が選ばれた。ここは大変大事なポイントだと思います。

これが決定した碑案です⁽⁴⁾。「登戸研究所跡碑」。そして「想う」という字は削除されます。これは皆の共通の想いだから必要ないという事になり、「過ぎし日は この丘に立ちめぐり逢う」という碑文にしました。これがどういう意味なのか普通の人は分かりません。そこで、登戸研究所に勤めた人たちの気持ちを聞くために、私たちは1990年代から精力的に動き出しました。そして私自身は唯一選ばれて1990年代半ばから登研会にも参加しました。この意味を聞くと、不思議な事をいうんですね。「過ぎし日は」というのは、登戸研究所に勤めた日々だと。「この丘に立ち」は、戦後40年過ぎた日々だと。そして戦後40年過ぎて、そろそろめぐり逢って語ってもいい、そういう意味だったのです。

「過ぎし日は」は、それぞれの多様性がありました。15歳くらいで勤めた人たちは川崎北部に住んでいる人々が圧倒的に多く、その人たちが言うには、ほかの工場などに動員されるのと



第2図 第16回登研会 集合写真
2004（平成16）年撮影（資料館所蔵）



第3図 第15回 登研会のようす
2003（平成15）年撮影（資料館所蔵）

は違い、条件は良かった。給料も良かった。それから電気技師の資格を取りに夜間学校に行ったとか、機械技師の資格を取ったとか、小林コトさんのようにタイピストの資格を取るために学校へ通わせてくれたとか。面白いのは、英語を学校では勉強しない時代でしたが、ここでは洋書を読めないとだめですから語学学校に通った。ですから、戦後は資格があるから就職に困らなかったなんていう事も話してくれました。しかし、ここで勤めたという事は一切言わない。そして所内に入ると、他の科の人たちや学校の同級生などに会っても話をしない。それから食事も自分の場所で食べる。要するに決まったことしかやってはいけない。そして家に帰っても何やってるかは話さない。しかし、ここに勤めている間にとんでもない兵器を作っているという事は皆さん段々と分かってきたんです。敗戦の時には証拠隠滅命令が出されます。これによって墓場まで持って行こうと解散したわけですから、戦後40年間誰も話すことなく過ごす。そういう日々を過ごしているんです。それがだんだんと苦しくなる。40年過ぎて昭和が終わるといふ時にこの丘に立ってあの時どうだったか話してもいい、そろそろ伝えてもいいと、登戸研究所を話したす象徴的な碑が「登戸研究所跡碑」として作られたわけです。これが作られるのは昭和の終わりですから、平成になってから除幕式が行われます。写真に写っている人が伴さんです（第4図）。このような形で、登研会がそろそろ話してもいいかなと私たちに語り始めた事が最初のきっかけだったとっていいと思います。



第4図 登戸研究所跡碑除幕式
1989（平成元）年11月撮影（資料館所蔵）

この碑が登戸研究所跡碑、そして背面には「過ぎし日は この丘に立ち めぐり逢う 登研会」と刻まれた登研会の名称で作っている碑があり、これはぜひ見ていただきたいと思います。これが、登戸研究所が保存され、資料館に繋がっていく最大の原点である事を知っていただきたいと思います。

そして関係者が色々な形で語り始めました。この右側の写真（第5図）の、真ん中の人が井上さんという人です。登戸駅付近で戦後は印刷会社などをやっていた人ですが、この人が最初に私たちと出会って名簿をくれたり、登研会との出会いを作ってくれた人です。そして先頭に立っている人が和田一夫さんと



第5図 井上氏、和田氏とともに調査する著者
1988（昭和63）年7月撮影（個人所蔵）

いう人で、この人は登研会 20 回のうち、後半の事務局長でした。この人が登研会を私たちに紹介し、私も登研会の仲間に入れていただいて、資料を提供してくれた人でした。『昭和とともに生きて（わが人生の足跡）』という体験記もまとめています。これも資料館で現在保存しています。この写真は 1988 年、随分古いですが、この和田さんの後ろにいるのが私です。髪が黒々としていて、本当に三十数年前からやっていたことを示す貴重な写真です。

この登研会の人たちが、実は明治大学に大変貴重な資料を提供するから保存してくれと呼びかけます。最初は 1999 年。明治大学構内には建物がまだたくさん残っていました。登研会はその建物の保存とそれを活用することを求めたわけです。これは戸沢学長の時代でした。まだ建物はたくさんありますから、そういう建物を活用して、なんとか後世に伝えてくれということで出した文書でした。しかしこの時期はまだ学生運動が盛んで、学内にも色々な政治的な対立があったこともありました。ですから、戸沢学長としては、これを残したい面もありましたが、それがなかなか難しいという事で頓挫したのが 1990 年代の終わりの時期でした。

ところが、21 世紀に入ると状況が変わっていきました。そして、2005 年に山田^{げんぞう}憲藏さんが登研会の会長となり、陸軍登戸研究所跡の保存と資料館設置の要請というものを出しました。登戸研究所の建物をぜひ資料館にしてくれという事を登研会で決議し、それを求めたわけです。それに対して当時の納谷学長は、これは大事なものだという事で認めて、保存の方向に一挙に向かっていくという事になったものが、「陸軍登戸研究所跡の保存と資料館設置の要請」という文章になります。この要請を出すに至るまでに、登研会は 20 回まで続けていくわけですが、その中で話す内容というのは多様でしたが、自分たちは一人一人が悪いことをしたかもしれない。しかし戦争というのはこういう事があるんだという事を伝えていく上では、大変大事な物なんだという事を皆さん確認されていくようになりました。こうして明治大学は 2010 年 3 月に第二科の建物を利用して資料館を開館します。この建物が風船爆弾の牛疫ウイルスを研究していた建物でした。久葉さんという方が語ってくれたのですが、この建物で瞬時に牛がコロリと死ぬようウイルス兵器を作って、零下 40 度でも生きるようなウイルス兵器にしたんだという事を語ってくれました。それは誇らしげにというものではなくて、苦しく、しかし自分たちが何をやったかという事で語ってくれました。それから松川仁さんもこの建物で働いていて、この人も多く語ってくれました。それは小粒菌核病菌という、稲が枯れるような菌をここで培養して、それを大量に中国で空から撒いてきたと。そういう事を苦しくもあるけれども、しかし伝えていかなければならないという思いで私たちに伝えてくれた内容でした。その小粒菌核病菌もこの建物で作られていたのです。大変危険な生物化学兵器を作っていた建物をそのまま保存して、それを資料館として設立させていくという明治大学の英断と、ここで働いた人たちの思いが凝縮してこの資料館ができ上がっていく、そういう意味では、画期的な取り組みが進められた事をこの経過は示していると思います。

(3) 登戸研究所遺構の保存と活用を求める市民の動き

そして、市民の保存・活用を求める動きは、その後も並行して進められました。一つは2006年に市民の中で、特に多摩区の人達を中心に「旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会」が結成されました。そして、9803筆の旧陸軍登戸研究所建物保存の要望署名も集めまして、川崎市議会に提出されました。明治大学は木造の建物については、なかなか保存できないということで、さっきの5号棟という偽札の建物なんかは、壊さざるを得ない。木造はすべて解体されてしまいました。非常に残念なことです。しかしその中で、明治大学としては第二科の、非常に重要な鉄筋コンクリートの建物は残し資料館にするということになりましたし、川崎市議会でもここはやはり文化財の価値があるという事で、映像を撮ったりですね、明治大学にできるだけ保存してくれという要請を出したりするきっかけが2006年から起こってきました。

(4) 明治大学の登戸研究所遺構の保存と活用を求める動き

そして明治大学について、これは次回の山田朗さんが話すことになると思いますが⁽⁵⁾、1995年から学術調査と保存活用の方法が確認されました。そして人文科学研究所の研究テーマとして選ばれて、私もその人文科学研究所の客員研究員として、3年間にわたって全国の調査にあたってきました。その調査の時も、登研会の人たちの援助なしにはできなかったと思います。例えば第1回の登研会の呼びかけ人になった小杉さんという人は奈良県に住んでいました。そして登研会の度に出てこられました。その人は疎開の時に、「兵庫県に自分は移動していたんだよ」ということを話されたので、兵庫県まで私たちは、小杉さんに頼んで案内してもらって、そして兵庫県の小川村という所でいろんな決戦兵器を研究したという事が分かりました。それから、川津敬介さんという人は、福井で偽札工場が疎開する時のための準備をしていた。こういう登研会の人たちの援助を受けながらですね、いろんな形で学術調査が進められたというのも、95年から97年にかけての出来事でした。方々を訪ねる、ただ知らない所を訪ねるといっただけじゃなくて、登研会の人たちの援助を得てですね、研究が進んで、明治大学としても保存の価値を、理解していくきっかけになったというふうに考えております。そして2006年に、明治大学は保存と活用の方針を決めて、それで4年間、資料館作りに入りました。最初、明治大学はこの時にですね、資料館は作っても良いけれど資料は無いんじゃないか、というふうにいうんですね。資料が無いんだったら建物は残すけれど、中は農学部のいろんな機材置き場にしても良いのかなんていう話もありました。ところが、明治大学が資料館を作るということを決めた結果ですね、一つは登研会の人たちが、自分たちはささやかなんだけどこんなものを持っているんだ、という形で登戸研究所のバッヂだとか、あるいは登戸研究所から出征していく時の日の丸だとか、その他いろんな資料を、一人一人は少数ですけれども提供してくれる

という事になりました。そして明治大学の学術調査の結果も踏まえてですね、資料が無い世界が、資料がだんだん集まってきて、そして資料館完成を迎えて、納谷学長はじめ幹部の人たちを迎えて開館に至ったというのが2010年3月の出来事だったわけです。本当に、そこまで来るには登戸研究所に勤めた人たちの努力、そして協力、そして市民の保存運動。こういうものが融合してでき上がってくるという、大変稀にみる取り組みの中ででき上がってきたとって良いと思います。

この第二科の建物、36号棟。ここは資料館ができる前は、大変みすぼらしい物置みたいな場所でもありました。それが資料館にするという事になりました。それでよくよく調べてみると、鉄筋の建物は4棟ぐらいありましたが、これ一つしか残りませんでした。しかし、この構造なんかを見るとですね、ものすごく立派です。鉄筋で天井は高く、本当に稀にみるもので、機密性がある、細菌兵器なんかを作ってもですね、大丈夫と思われました。しかしそこから、外に漏れるものもあったと考えられます。この付近で、当時稲が実らなかったという事件が発生しました。どうもこれは、この建物で作っていた小粒菌核病菌という稲を枯らす菌が、外に漏れ出した結果ではないかと、今では私たちは考えることができますが、当時は生田の人たちは、ここから出た菌だと訴えることもできなかった、というふうにいわれました。しかし、その噂話が、私たちが登戸研究所を調べる直接的なきっかけになったということも考えてみると、この建物が残る意味というのは、大変大きなものがあると思われれます。この付近は蛇もうんと出ます。マムシ谷なんていうものもありますが、そういう蛇の毒なんかも研究した建物がここだと考えてよろしいと思います。

(5) 資料館が開館し改めて実感したこと

資料館が開館して10年になりました。この間、大変不思議なことがいろいろ起こりました。登戸研究所に勤めた人で登研会に入らなかった人、そしてまったくその口を開かなかった人が大勢いました。その方々が資料館ができてから、資料館を訪れて来るんです。そして言う事は、ここ(第6図①)にも書いてある「ほっとした」と語るんですね。これは皆さん共通の言葉でした。そして、この①に書いてあるその代表的な例は、70年間沈黙していた元勤務員が来館した時でした。この方は第三科という、登戸研究所の偽札を作る場所に、その紙を抄く場所に15歳で勤めた。これは1943年の年でした。ですから戦争が終わる直前。そして2年間頑張って勤めましたが、敗戦にな



第6図 講演会当日のパワーポイント資料より

りました。そして敗戦処理をして解散するんですが、お前は非常にまじめだ、紙を抄く技術とかいろんなことが素晴らしいという事で、山本憲蔵さんという人に見込まれて、米軍の備員に
来いという事で雇われるわけです。そしてサンフランシスコに10年間行って、紙を抄いたり
いろんな登戸研究所の技術的なものの指導をしました。したがって戦前は登戸研究所という、
偽札を作ったなんていうとんでもないところに居たという体験をした人が、戦後は米軍の備員
になって、そして二重三重に喋ることのできない人生を送ることになったんです。ところが、
70年間沈黙していた彼がですね、登戸研究所資料館に来て、それで偽札の事も非常に詳しく
展示されていました。そして、戦後は米軍の備員になった人もいるという事も展示に書いて
います。「ああ、自分が沈黙している必要はあまり無いんだな」ということで、ずっと説明を聞
いて、「ほっとしました」と涙ぐんで語ってくれました。この人とは死ぬまで付き合いました。
そういう方ですが、そういう勤めた人たちの思いというのは、悪いことをやったという思いを
抱えながら、しかしそれを話しちゃいけないという苦しみ。この中で人生のほとんどを過ごし
てきた。このような人たちを、本当に心から解放していく意義がですね、この資料館にあった
んだというふうに、私たちは今では考えています。ですから戦争というのは、その時苦しいだ
けじゃなくて、70年間も苦しみ続けるような歴史を背負わせることになる。そんな歴史をで
すね、私たちは考えると同時に、資料館ができたという意味をですね、単に過去に何をやった
のかを伝えるだけではなくて、そこに勤めた人たちの気持ちを心から解放して、そして戦争の
ない時代、平和な時代を作っていく意味を、私たちは本当に真剣に考えていくことができるこ
とが大事だなと思っているわけです。この①についてはですね、私たちは資料館ができてから、
何度も何度も体験した話でした。そして資料館としては、体験者から証言会として聞くという、
話を何度もしてくれるという契機になりましたし、それから関連することと言いますと、風船
爆弾を作った女学生の方々。この人たちもまじめにやったわけですね。それを話さないで
きた。それを今はもう話しても良いんだということで、高知とか、あるいは高崎とか、方々の当時の
女学生が語ってくれるという事にもつながっていきました。ですから、資料館があるかないか
ということは、本当に決定的に違うものだと考えています。それと関連して、資料館ができた
結果、登戸研究所所員の遺族からいろんな資料の提供も受けることができるようになりました。
ですから戦争遺跡として残っているだけじゃなくて、資料館が作られてくる30年間の軌跡の
到達点が、私たちを大きく励まし、そして新しい研究の道筋を作ってくれたと思っています。

それから二つ目は、資料館ができてから中学生・高校生・大学生が大勢訪れます。毎年訪れ
る高校、中学があります。この生徒たちは、やはり自分たちが学校で学ぶ戦争と違うんだと、
そういう事を実際体験されると思います。風船爆弾なんかもそうですし、風船爆弾一つ教科書
で習ったことがない。ほとんど風船爆弾について学ぶ機会というのは無いと思います。しかし
風船爆弾は結果は大したことは無かったけれども、オレゴン州で子供たちを、風船爆弾に触れ

て殺してしまうという残虐な事件も起こしているわけです。ですから、戦争というものは、本当に何の罪もない人たちを殺すことになるんだということを、痛感してもらえることができるのが、この登戸研究所資料館の意義ですし、そして実物をいっぱい置いていますので、そのことから学んでもらう事も大変多いことだと考えております。

それから三つ目に、登戸研究所を通じた平和教育。これは海外に向けても発信できているという事が大事だと思います。今、オランダの大学院で研究している人が、ここに来ましてですね、やはり日本にもこういう資料館ができて、そして戦争を考えさせる場がある。これを世界にも広げなくちゃいけない。そんなふうに語ってくれた人もいます。登戸研究所資料館の設立そのものの方針として、平和教育登戸研究所の資料館と名付けました。その目的は平和教育に役立てよう、そして科学教育に役立てよう、歴史教育に役立てよう。こういう事になっているわけです。そういう意味で、登戸研究所を通じて若者に伝えていく、そしてさらに、その次の世代にもつなげていく。そういう、この資料館が開館された事は大変大事なことではないかと思えます。

(6) 今後の課題について

①大学・行政・市民の連携による文化遺産登録

今後の課題について触れますが、大学・行政・市民の連携による文化遺産という事を考えています。「負の遺産」を、平和を創造する文化遺産に、ということで私たちは市民と一緒にずっと取り組んでまいりました。2019年第1回の川崎市地域文化財というのが選定されましたが、この中に、なんと登戸研究所遺跡群というのが指定されました。したがって、川崎市の文化遺産として継承されていく、一つの内容としてこの登戸研究所が選ばれたということは、かなり決定的に重要な意味があると思っている次第です。この点では、川崎にもいろんな戦争遺跡がありますが、連関してですね、東部62部隊とか日吉台地下壕だとか、そういうものも含めてですね、戦争が過ぎてもう75年を過ぎました。しかし、その戦争が単に過去のものでなくて、未来を照らすときにどんな意味があるのか、という事で私たちは、この地域文化財として今後も見返し続けていくという事が大事ではないかと思っている次第です。

②若い世代への継承

そして、歴史教育・平和教育・科学教育の発信・受信の場に、ここをしようということが、最後の結論になりますが、若い人が最近多く来館しているというのは、先程もお話しました。今も高校生が、調査を継承しています。とりわけ、駒ヶ根市の方では、この登戸研究所資料館ができて、やはりそれと連携して資料館を作ろうという動きが、昨年あたりから急激に展開されています。駒ヶ根市にはですね、1945(昭和20)年の4月以降、登戸研究所の第二科を中

心として多くの人たちが移動して、そこで松代大本営ができた暁には、天竜川からのぼってくる米軍を最終的に阻止しようという事で、いろんな謀略兵器を研究しています。毒入りチョコレートなんかもやっていますし、最近の研究成果では登戸研究所の人が使った机の中から、どうもワクチン研究をしていたんじゃないかという事が発見された⁽⁶⁾。だからこれは、細菌なんかを撒いて自分たちはワクチンをやって生き延びる。そういうものでもあったんじゃないかとか、新しい研究成果が今でもできています。そして、その駒ヶ根市には残っているいろんな遺跡がまだあって、そこを駒ヶ根市の文化財として、博物館を作ろうという動きが、現在進行形で進んで、そしてこの登戸研究所の、明治大学の資料館と連携してですね、日本の戦争の中の負の遺産。これを伝えていくネットワークを作ろうという事が進んでいます。その中には、駒ヶ根市の赤穂高校平和ゼミナール。そういう人たちが今でも活動しています。川崎でも法政二高。今年はそうでもないかもしれませんが、去年あたりまでやはり体験者から聞いたりしながら、語り継ぐ活動をしていました。こうして若い世代にも継承されていくことができる。これが、非常に重要なポイントだと思います。

おわりに

以上ですが、先程から申し上げましたように、主要参考文献について少し紹介しながら、復習していきたいと思いますが、齋藤充功さんが『謀略戦 ドキュメント陸軍登戸研究所』というのを書いたのが1987年でした。私たちが調査をする、本当に同じ時期でした。そして、駒ヶ根市の木下健蔵さんという人は、『消された秘密戦研究所』、これは1994年。これは駒ヶ根の高校生が、やはり伴さんの聞きとった内容から励まされて、木下さんが私たちと一緒に研究し、本をまとめられました。そして、伴さんそのものがですね、2001年に『陸軍登戸研究所の真実』というのをまとめます。この本のいきさつを、ちょっと紹介したいと思いますが、伴さんは第二科のですね、謀略兵器。青酸ニトリルとかですね。その研究開発をして、南京で人体実験をした人でもありました。その人が、登研会の碑を建てる、その代表になったんですね。それが1988年です。その1988年に伴さんは登研会の碑を建てる。そして、登戸研究所の事をそろそろ話しても良いかなというふうな思いに駆られたと思います。そして、皆さんに原稿を頼んで、いろんな生原稿を集めます。それを集めながら、本になる前に亡くなってしまいました。したがって、生前はこの本を出版することはできませんでした。その原稿を、私が引き継いだわけです。そして、なんとか本にまとめていこうという事が出したのが『陸軍登戸研究所の真実』という本でした。この本の中の特徴としては、戦前登戸研究所がどんなことをやったかというのを、いろんな人に手記を書いてもらって、まとめた所に特徴があります。ですから松川仁さ

んという人からは、中国で細菌戦をやったこと。あるいは、久葉さんという人からは牛を殺すウイルスの研究開発をどういうふうに行ったのかとか。そういう事を細かく書いている、非常に重要な資料になりました。伴さん自身が、南京で人体実験したことを初めて原稿にまとめています。その生原稿を見てですね、私はびっくりしました。中国南京で人体実験をした。例え戦争中といえども、申し訳なかった。冥福を祈ると書いていますね。その事を奥さんに確かめましたら、奥さんは伴さんがその原稿を書いたときに「お前にも長い間すまなかったな」というふうに語ってくれたというんですね。やはり伴さんそのものが、人体実験をやったりしながら登戸研究所の幹部として働いた。しかし、やはり悪いことをした、何とか謝りたいという思いを抱えながら、戦後も生きていたという証だと、それを私たちは出すことができたということで、大変重要な本だと考えております。ただし、戦後については非常にその、書いてはならない事があったかもしれませんが、いろんな原稿の中に違いがありました。したがって、この本は戦後編も伴さんは書いていましたが、それについては省略したという所に、一つの特徴があります。その他、大学の研究グループで書いたものが『陸軍登戸研究所』、青木書店。それから『駿台史学』。それから山田朗さんとか私たちが書いたものとか。私自身も2012年に『陸軍登戸研究所と謀略戦』というものをまとめています。そういう中で、やはり大事なことは、単なる研究者がこういうものを行ったんだという形ではなくて、体験した人たちが本当に苦しみながら心を開いてくれて、その内容がこの登戸研究所の資料館の方々に詰まっているということ。そして、資料館そのものが後世に細菌戦とか、そういうものをやる場合にこんな建物で行ったんだ、という事を伝えていく。そういう意味で、この登戸研究所資料館というのは、本当に稀に見る資料館ではないかと私自身は思っています。ぜひ、4月ぐらいから開館できた暁には訪れて頂いて、登戸研究所の実態・実相、そしてこれが明らかになって来た歴史的な背景等々をですね、考えていただければと思います。

今日は本当に、直接皆さんの顔を見て話し、そして質問なんかを受け付けたいところだったんですが、こういう機会ですから全くできませんでした。申し訳ありませんが、またの機会をぜひ期待しております。どうもありがとうございました。

〔注〕

- (1) 『明治大学平和教育登戸研究所資料館ガイドブック』 p.12, 「1960年代の生田キャンパス」参照。
- (2) 本誌 p.10, 第17図参照。
- (3) 本誌 p.7, 第9図参照。
- (4) 本誌 p.8, 第11図～第12図参照。
- (5) 2021年5月15日に開催した。『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』第8号(2022年9月発行予定)に掲載予定。
- (6) 駒ヶ根市地域交流センター(赤穂公民館)にて2021年2月23日に開催された登戸研究所調査研究会主催「登戸

研究所シンポジウム」, 井上直人氏報告より。

〔追記〕

本稿は, 2021 年 3 月 20 日 (土) Zoom のウェビナー機能を利用して開催したオンライン方式の講演会「登戸研究所掘り起こし運動 30 年のあゆみ」(企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった」関連イベント)を基に構成した。